
軽子坂高校の怪談(多分)(明×環、チャーリー×ユミ)

虎華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軽子坂高校の怪談（多分）（明×環、チャーリー×ユミ）

【Nコード】

N1505B

【作者名】

虎華

【あらすじ】

これは私、虎華がメガテンと言っ言葉すら知らなかった【匿名希望者様】に無理矢理書いて頂いたもので、しかも「まだ未完だよ。」と言われていたのに待ちきれず奪ってしまった作品。投稿する許可は得ておりますが（溜息）なので未完で終わりです。

キンコンカーンコン・・・下校の時間。

軽子坂高校の屋上に4人の男女がいた。

フェンスにもたれかかっている、ショートカットの女の子は内田環と言う。

金髪のセミロングの女の子は白川由美。

同じく金髪でタバコを吸っている、黒い慎二。

そして、環の横にいる、黒髪のバナナダナをしているのは宮本明だ。この4人のうち環以外は俗に言う不良であるが、皆仲がよい。

「でもなあゝ。いきなり霊見たって言われてもなあゝ。」

「私もチャーリーの意見に賛成だな。」

と由美。チャーリーと言うのは黒井の二ツクネームである。

その昔、自転車を盗もうとした事からついたのだ。

「絶対に見間違いないじゃないもん。明は信じてくれるでしょ？」

環が頬を膨らませながら言う。

「俺もちよつとそれは・・・。」

「うわゝん明のばかあ。」

環が泣きそうな顔になる。

由美が慌ててなだめる。

「んじゃ、こうしたら？今日さ、このまま学校残って調べるの。」

「いいね、それ。」

いきなり環の表情がパアと晴れた。

「明もチャーリーも残ってね！もちろん由美も。」

（え、'、'）

（マジかよ・・・）

（言うんじゃなかったな...。）

3人の思いをよそに環は早速計画を立て始めた。

「えつと懐中電灯持ったでしょ。ゴハンも食べたし、カメラも持った……と、これでよし。」

真っ暗な学校で教室に潜んでいた4人が動き出した。

環が最終点検を終え、教室を出て行こうとした。

しかし誰も教室を出ようとしない。

やる気満々だった環も、真っ暗な廊下を見て足がすくんでしまっていた。

結局、明を戦闘にして4人は進んで行った。

真っ暗な廊下は、今にも何か出てきそうな感じがする。

「やだあ。怖い……」

由美がそう言いながらそつとチャーリーの手を握った。

「……」

チャーリーは既に声が出なくなっていた。

「何か出てきそうだな。」

明がボソツと言った。

「冗談はやめてよ。」

由美が明の背中を睨んだ。

「出てきてくれなきゃ困るもん。」

暗がりに慣れてきたのか、環は至って普通の状態に戻っている。

「あ、理科室だ。入ろうか？」

疑問形で言っときながら、環は明の手を引いてさっさと入ってしまった。

ガラッ……ピシャン

二人が入ったかと思うと突然ドアが閉まり、開かなくなってしまった。

「え。うそゝあかないゝ。」

「開けるのは無理だな。」

「えゝゝ明ゝゝ！」

いきなり環の手に生ぬるい液体が触れた。

「きゃっ！何！？」

「どうした？」

明が環を懐中電灯で照らした。

「……！！」

環の手は真っ赤に染まっていた。

彼女は驚きながらも後に気配を感じて振り返ると、

そこには血に染まった人体模型が立っていた。

「キヤーーーーーッ！」

一方明の方は骸骨に背後から腕をつかまれ、必死に払っていた。

環の悲鳴を聞き、明は骸骨に馬蹴りを喰らわすと彼女の方へ駆け寄った。

「大丈夫かつ！！」

そう声をかけた時、環は既に人体模型を倒していた。

明がもう一度ドアを開けようとすると、何故かすんなりと開いた。

「環、いくぞ！」

「うん。」

今度は明が環の手を取り廊下へ出た。

しかし、由美とチャーリーの姿は見えない。

「あの二人はっ！？」

「とりあえず、一旦学校の外へ出るぞっ！」

明と環は走り出した。

「ちょっとゝなんで開かないのよ！」

「知るかつ！！おい内田っ！？宮本っ！？開けろっ！」

「ねえ……チャーリー。」

由美の表情が固くなっている。

「ねえってば・・・。」

「何だよ？」

やっと振り向いたチャーリーに由美が言う。

「アレ・・・。」

「うおっ！！？何だアレッ！」

廊下に青く光るハサミが数本浮かんでいた。

そしてそれらが2人目掛けて・・・

「きゃああッ！」

「うわああッ！」

猛然とダッシュする二人。階段を駆け上り廊下を走り。

途中でドアの開いている教室に逃げ込んだ。

バンッ（ドアを閉める音）

「はぁ・・・はぁ・・・これで大丈夫だろ。」

「うん・・・ゼー・・・ゼー・・・。」

「お。あれって美術のやつじゃねえ？」

「ホントだー・・・コレ山中くん？似てるー。」

「だな。」

チャーリーが見つけたのは、美術でやっている自画像だった。

由美はそれを色々と手にとって見ている。

「ねえ、これすごくない？」

「本当だ。本人そっくりじゃねえか。」

「あれ？明のヤツこのクラスだっけ？」

「明ってこの2つ隣のクラス・・・よね。」

絵がいきなりふくらみ、画用紙から明が出てきた。チャーリーも由美も声が出ない。

「「——ッ！」」

「あれ、お前ら・・・何で？」

明の方はあまり表情が変わっていない。

「何で・・・はこっちのセリフよ！」

「何でお前、紙から出てきたんだっ!？」

「確か環と校舎から出たハズなんだが・・・。おいっ環は!？」

「え?見てない。もしかしたら明みたくなってるのかも。環にそっくりな絵探そーよ!」

由美がそう言った時に、既にチャーリーがそれを見つけていた。

「これじゃねえか？」

さつきと同様に環が出てきた。

もう二度目なので由美たちは驚きはしない。環一人、ほえ?とした顔をしている。

「?由美とチャーリーがいる・・・。」

「それよりもさっ霊がいるって言うの分かったから帰ろーよ!」

「さんせい。」

「待てお前ら。俺と環は出れなかったんだぞ？」

ドアに手をかけようとしていた二人がゆっくり振り返る。

「じゃあさ・・・。」

「出れねえってコトか？」

「まあ、そう言う事だろうな。」

「うそーっっ」

由美が頭をかかえた。

「大丈夫!!ボスを倒せばきつと出れる!」

環がそう言い放つ。

「そうだなっ!」

「そうねっ!」

チャーリーと由美も乗り出す。

「これはRPGじゃねえし、ボスなんかいるのかっ!？」

明のまっとうな意見は3人の耳には入っておらず、

チャーリーに至っては壊れかけの机からパイプをはぎとっている。

「これでよしっ!」

「じゃ行こっか。・・・明も早く!」

明は心の中でどこにつ!と突っ込み、もう彼女らには何も言うまいとも思っていた。

一行は職員室へ向かう事にした。

「失礼しまーす。」

優等生の環は、きちんとお決まりの文句を言って中へ入った。

(夜中に学校にいると言う時点で既に優等生では無いだろうが。)

「何で職員室に来たかったの?」

由美が聞くと、環は

「だってボスは校長でしょ。こう言う場合。」

と当然とばかりに言う。

そしてやはり由美とチャリーは流され、明は苦笑するしかなかった。

「だから途中で演劇部に寄ったんだな。さすが内田!」

「まーね。顔ばれるの嫌だし。」

実は一行は演劇部から勝手に仮面を持ち出し身につけていた。

「こーら君たち。こんな時間に何やってるの。そんなものまでつけて。」

大きなマスクをした女の人がいつの間にか立っていた。

「あんな先生、いたっけ?」

「見たことないぞ。俺は。」

小声で由美とチャリーが話している。またしても環が何か思いついたらしい。

「分かったわ。・・・あなた、口裂け女でしょ!」

びしっと女の人を指差す。そんな環を見てその女はニヤツと笑った。

「残念。私は口裂け女じゃないわ。」

女はマスクを外した。顔はどう見ても普通の人、だった。

けれども明は嫌な予感がし、チャーリーから鉄パイプをひったくた。

「オイ！何するんだよ！！」

「あーら。私の正体バレちゃった？」

女の爪がみるみる変形してゆく。

「私のホルマリン漬けのコレクションに貴方達も加えてあげるわ。」
女が襲い掛かって来た。髪の毛が伸び、由美や環の体にまきついていく。

「きゃああつ。」

「話して！」

『チャーリー』と明が目配せする。

チャーリーは明の言わんとしていることがわかり、『OK』と目で返す。

明が女の鳩尾に一発喰らわせる。

女がひるんだスキにチャーリーは女の髪を近くにあったハサミで切り、

ついでにその髪にライターで火をつけた。炎が女の体へと伝わっていく。

「ぎゃああ髪が、髪がつ。」

「今のうちに逃げるぞ。」

「ほら、行くぞ！」

明は環の、チャーリーは由美の手をつけみ走り出した。

「チャーリー、前っ！」

「え！？」

チャーリーは目前にあった鏡にぶつかった。由美も止まりきれずにぶつかる。

「二人とも何してんのよ。大丈夫？」

「ってオイ。チャーリー！？由美！？」

チャーリーと由美が鏡の中に吸い込まれていく。

『くすくす。この人達、ボクと一緒に遊ぶんだ。』

鏡の中から声がした。10歳前後ぐらいの、幼い男の子の声が。

「おい、あの二人をどこやった!？」

『ここにいるよ。』

ドスッ　　にぶい音がした。

環が壁を殴ったらしい。壁が思いつ切りへこんでいる。

「あの二人、離して、言うコト聞かなきゃ殺るよ?」

にこのことかわいらしく言っているが、何気に怖い事を言っている。

『うわーん。コワイようつごめんなさい。返しますー!。』

チャーリーと由美が

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1505b/>

軽子坂高校の怪談(多分)(明×環、チャーリー×ユミ)

2010年10月20日08時09分発行